[科目区分]：教職科目Ａ　　[授業科目名]：道徳教育指導論

平成２５年度「授業評価・授業研究報告」

学校教育講座　梶原郁郎

（1）授業の目的・内容

道徳教育指導論（2 年次後期：受講学生数 136 名）の目的を、下の教育学部「教職課程のディプロマ・ポリシー」（DP）との関係において明示しておきたい。

（1）教科・教職に関する幅広い基礎的知識と、得意分野の専門的知識を有している。
（2）学校現場で生じている問題を始めとして地域や社会全体に関わる課題について、適切な対応を考え議論することができる。
（3）児童・生徒の発達に応じた授業の構成や教材・教具の工夫ができる。
（4）実践から学び、自己の学習課題を明確にして、理論と実践を結びつけた学習ができる。
（5）教育的愛情を持って児童・生徒に接することができるとともに、多世代にわたる対人関係力を身につけ、社会の一員として適切な行動ができる。

この DP（1）（3）（4）との関わりを意識して、道徳教育指導論は主に次の項目を講義内容とした。

（a）教育課程行政における知識・理解と意欲・関心・態度との扱い
（b）意欲・関心・態度の評価の問題
（c）意欲・関心・態度を評価することによる潜在的カリキュラムの問題
（d）社会認識形成と行為との内的関係
（e）指導案の書き方

これらの項目は、道徳教育指導における専門的・基礎的な知識として選択したものである。まず DP（1）（3）と講義内容項目（a）（b）（c）との関係についてである。意欲・関心・態度が評価項目の筆頭に位置づけられた 1991 年指導要録によって、いかなる問題が生起してきたのか、これは現在にも存続している問題である。したがって将来教師となる学生にとって、必要な知識といえる。その問題を教師が潜在的カリキュラムの問題として認識しておく必要性を学生が把握できるように、その問題を潜在的カリキュラムの問題として説明した。次に DP（3）（4）と講義内容項目（5）との関係についてである。道徳服副読本の題材をいくつか提示して、それを指導案に書く実践的練習を施したものである。内容指導をする三つの観点を用意して、その観点の下でどのような発問を作るのか、この課題にいくつかの学年を想定して、取り組ませた。最後に講義内容項目（d）についてである。社会認識形成と行為との内的関係は道徳教育の課題の根幹をなすものだが、この課題に、『君たちはどう生きるか』をテキストとして取り組んだ。これは、教育実践に直接役立つものではないが、そうした観点からテキストを読む訓練は、道徳教育を行う教師として必要であるという意図の下、項目（d）を講義内容として取り入れた。

（2）授業の工夫

将来の実践主体の立場に学生を立たせて物事を考えさせるということを方針として、この授業を行うように工夫した。講義内容項目（a）については、自分とは関わりのない情報として学生が受容する危険性を回避するために、次のように課題提示することからはじめた。教育課程行政における知識・理解から意欲・関心・態度への重点移行の問題がみなさんの将来の仕事にどのような影響を及ぼすことになるのか。この課題提示からはじめて、講義内容項目（b）（c）へと展開させることによって、さらにその項目（b）（c）自体も、将来教師となったとき自身の問題となる情報として、説明することによって、これらの一連の講義内容を、学生が教師として必要な情報として受容できるように工夫した。

次に講義内容項目（e）については、その情報が教育実習でどのように必要となるのか、

この点をまず説明した。その上で、指導案を作る際に有効な三つの観点を提示して、その観点に基づく発問系列の一例を提示した後、学生にほかの教材で発問系列を実際に作らせる練習に取り組ませた。

最後に講義内容項目（e）についてだが、これは、実践べったりの講義内容に偏ることを回避することを意図して、さらに道徳教育の課題として社会認識形成と行為との内的関係について考えていくことができることを目的として、取り入れたものである。その目的を学生に保障するために、『君たちはどう生きるか』の主人公の社会認識形成の筋道を、章ごとに描いていくという課題に取り組ませた。その課題に取り組むことができるように、第3章から読みはじめるようにして、毎週、40頁ほどの分量を読む課題を課した。その筋道の読み取りの際には、章間の関係（主人公の社会認識形成の筋道）を本文に基づいて解釈するという課題を常に根底に据えさせた。

（3）授業の成果・課題

この講義の成果を判断するために、今回、講義内容項目（d）（e）に関する次の調査を新たに行い、成果を見る材料とした。その質問項目と結果とを以下に示しておきたい。

まず［質問（1）］は次の項目である。「道徳副読本の教材を二つ取り上げて、指導案を作る練習をしました。指導案の書き方の一例は、理解できましたか」。

できた	ほどほどできた	できなかった
36%	56%	9%

この指導案を書く練習の量については、「ちょうどよい」とする学生は64%であった。これはあくまで自己申告による情報だ、9%の学生に対する支援が課題として示された。

次に［質問（2）］では次の項目を調査した。読んで授業に臨んだかどうかについては、「毎回」と「ときどき」が85%であった。

①小中高の授業に直接はつながらないこのような本を読むことは、必要だと思うか。
②章と章との間を、本文に基づいて読むという読み方は経験できたか。
③この経験は教師になるものとして必要と思うか。

この調査結果を①②③の順に示すとは次の通りである。

必要	ほどほど必要	必要ではない
33%	56%	10%

できた	ほどほどできた	できなかった
24%	59%	18%

必要	ほどほど必要	必要ではない
47%	45%	7%

この項目①③については「必要ではない」という回答者が以外に少ないというのが率直な感想である。実践べったりの講義内容が大学の講義内容をますます多く占めるようになる傾向を前に、講義者としては、講義内容（d）については講義から外すことも考えさせられることもあるが、この結果を前に、こうした講義についても、学生に内的な充実を保障するために、よりよくすべく取り組んでいきたい。また項目②については、章間に関する私の解説を聞いて分かったとすることを意味しており、章間の関係を自ら考えた上でのことでないことは、講義における学生の回答状況からも明らかである。したがって、その自らの思考をどのように促していくのか、この点は課題としておさえておきたい。

最後に、道徳教育指導論に関する総括的質問として次の項目を尋ねた。「道徳教育指導論の授業は、将来の教師としての仕事の参考になりましたか」。この結果は次の通りである。

なった	ほどほどなった	ならなかった
64%	38%	1%

この結果は一定の評価ができるかもしれないが、指導案を作る練習を学生が想起して、回答した可能性もあると思われる。それ以外の講義内容も含めて講義内容全体を指す評価であるかどうか、この点を確認する必要がある。

以上の調査結果とともに試験の結果をも踏まえて、次年度の道徳教育指導論に備えたい。講義内容項目（a）に関する試験結果が悪かったことなどを踏まえて、学生の講義内容の理解状況を整理して、次年度の準備をする必要がある。